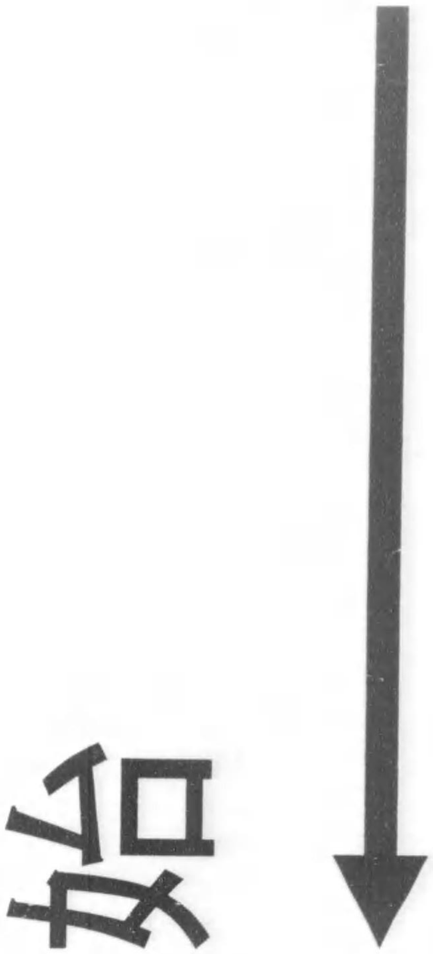
324
606



神樂之栞

大正八年九月

賀茂郡神職支會

324-606

帝國圖書館藏

目次

天岩戸神樂……一
八重垣……一三
國讓……一九
天孫降臨……二五
胡子舞……三一
神武天皇東征……二七
熊襲征伐……四五
日本武命之東夷征伐……五一
神功皇后三韓征伐……五五
蘇我入鹿誅戮……六三
入唐事蹟……六七
一條堀河戻橋之鬼女退治……八一
大江山……九一

大正
8. 9. 8
内交

天乃岩戸神樂

掛巻久母綾畏伎此乃神社爾鎮坐座須大神の大前に舞出たる者を如何なる者と思召す吾は抑も津速産霊神の子にして興台産霊尊とは某なり

吾此處に舞出する事餘の義に非ず此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞嗚命我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放地溝埋女樋放地敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ於是天照大御神は天石屋戸を閉て許母理坐しき卽ち高天原皆闇く葦原中國悉に暗し爲に八百萬神等手足の悶搔是に困り高御産靈神の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を仕らんと存じ候得者今よりも天安の河原を差して急ぎけるなり

急げば早や天の安の河原に着いて候暫く八百萬神等を待ち居り申すなり

掛巻久母畏伎此乃神社爾鎮坐座須大神乃大前に舞出たる者を如何なる者と思召す吾こそは興台産靈命の子天兒屋根命とは某なり

吾此處に舞出する事余の義に非ず此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞嗚命我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放地溝埋女樋放地敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ是に天照大御神天石屋戸を閉て許母理座しき卽ち高天原は皆闇く葦原中國悉に暗し爲に八百萬神等手足の措悶是に依り高皇産靈神の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を仕らんと存じ候得者今より天安の河原を差して急ぎけるなり

急げば早や天安の河原に到着いて候暫く八百萬神等を待ち受け申すなり

掛麻久母畏伎此乃神社爾鎮里座須大神乃大前に舞出たる吾こそは高皇產靈神の子にして天太玉命とは某なり

吾此處に舞出する事余の義に非す此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞嗚命

我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放溝埋樋放敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ於是天照

大御神天石屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中國は悉に暗し爲めに八百萬神等手足の措罔是

に因り高皇產靈神の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を仕らんと存じ候得者今よりも天安の河原を差

して急ぎけるなり

急げば早や天安の河原に到着て候暫く八百萬神等を待ち居り申すなり

掛麻久母畏伎此　神社爾鎮里座須大神の大前に舞出たる妾を如何なるものと思召す吾は抑も天鈿女の命とは

妾の事

自ら此處に舞出する事餘の議に候はず承り候へば天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と互に劍と玉の誓約をなし給

ふ其時に素盞嗚命我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放溝埋樋放敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給

ひければ是に天照大御神怒り坐し天石屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し爲

めに八百萬神等手足の罔措是に因り高皇產靈神の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を爲さんと候へば

今よりも天安の河原を差して急ぎ申すなり

急げば天安の河原に到着て候暫く間八百萬神等を待ち居り申すなり

掛麻久母畏伎此乃神社爾鎮里座須大神の大前に詣出たる吾こそは思兼命の子にして天手力雄命とは某なり

吾此處に詣出する事余の義に非す此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と互に劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞

嗚命終に我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放溝埋樋放敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ

天照大御神怒り座して天石屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し爲めに八百萬

神等平足の措罔是に高皇產靈神の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を仕らんと存じ候得者今よりも天

安の河原を差して急ぎ申なり

急げば天安の河原に到着て候暫く八百萬神等を待ち受け申すなり

掛麻久母畏伎此乃神社爾鎮里座須大神の大前に詣出たる某を如何なる者と思召し吾は抑も天糖戸命の子にし

て石凝姥命とは吾の事なり

吾此處に詣出するは余の義に非す此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と互にに劍と玉の誓約をなし給ふ時に素

盞嗚命終に我ち勝ぬと宣ひて勝佐備に畦放溝埋樋放敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひけれ

ば是に天照大御神怒り坐して天石屋戸を閉して許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し爲め

に八百萬神等手足の措罔是に高皇產靈命の勅に因り天安の河原に神集に集神議り事を致さんと存じ候得者今

より天安の河原を差して急ぎけるなり

急げば天安の河原に到着て候暫く八百萬神等を待ち受け申すなり

掛麻久母畏伎 此乃神社爾鎮里座須 大神の大前に詣出たる某を如何なるものと思召し吾は抑も櫛明玉命とは某なり

吾此處に詣出する事余の義に非す此頃天照大神と伊呂弟素盞嗚命と互に劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞嗚命終に我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放地溝埋女樋放地敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ是に天照大神怒り坐して天石屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し爲めに八百萬神等手足の措罔是に高皇產靈神の勅に因り天安の河原に神集ひに集神議り事を仕らんと候得者今よりも天安の河原に差して急ぎ申すなり

急げば天安の河原に到着て候暫く八百神萬神等を待ち居り申すなり

掛麻久母畏伎 此乃神社爾鎮里座須 大神の大前に詣出たる某は如何なるものと思召す吾は抑も天目一箇命とは某なり

吾此處に詣出する事余の義に非す此頃天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と劍と玉との誓約をなし給ふ時に素盞命終に我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放地溝埋女樋放地敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯し給ひければ是に天照大御神怒り坐して天石屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し爲めに八百萬神等手足の措罔是に高皇產靈神の勅に因り天安の河原に神集ひに集ひ神議り事を仕らんと存じ候得者今より

も天安の河原を差して急ぎ申すなり

急げば天安の河原に到着て候暫く八百萬神等を待ち受け申すなり

興臺產靈命

此處に集ひ坐せる八百萬神等に申し候

八百萬神

御前に候

興臺產靈命

此度天照大御神と伊呂弟素盞嗚命と劍と玉の誓約をなし給ふ時に素盞嗚命終に我勝ちぬと宣ひて勝佐備に畦放地溝埋女樋放知敷蒔伎串刺等荒び給へども天照大神は田之阿離知溝埋武留波地奚阿多良斯登許曾爲つらめと詔直し給へど猶其惡しき態止ずして天照大御神の忌服屋に坐しまして神御衣織らしめ給ふ時に服屋の頂を穿ちて天班馬を逆剝に剝ぎて墮入る時に天御衣織女見驚きて梭に陰上を衝きて死せき是に天照大御神怒りまして天の岩屋戸を閉て許母理坐しき即ち高天原は皆闇く葦原中っ國は悉に暗し是に因り常夜往く萬の神の聲は狹蠅那須皆滿き萬の妖發りき爲めに八百萬神手足の罔措是に高皇產靈の神の勅に因り諸神等神集ひに集ひ坐したる事に候へば天照大御神の御心に叶はすとも大御心を和め奉り招請坐世奉りて昔の秋津洲と照り渉らせ給ひ御政事を御覽し給ふ樣祈願奉らむと候へば何卒各々好き神議事を爲し給へ

天鈿女命

大神は諸神等に優秀たる遠謀深慮の命なれば萬の神の長となり各々其行事を指定め給へ

興臺産靈命

心得申して候

然れば天太玉命に申候

汝命は率ゆる所の諸部神の内石凝姥命をして天安の河原の河上之天堅石を取り天金山之鐵を取りて鍛人天津麻羅を求ぎて日の像の鏡を作らしめ又櫛明玉の命をして八尺句珠之五百津御須麻流の珠を作らしめ又長白羽命をして麻を植へ青和幣天日鷲命をして津咋見の命に穀の木を植へて白和幣を作らしめ然して天香具山の五百津眞賢木を根許士に許士て上枝に八尺勾瓊之五百津御須麻流之玉を取著け中枝に八咫鏡を取繫け下枝に白和幣青和幣を取垂て太刀御幣帛捧げ奉り給へ且又岩屋戸の開けた曉は大御神の復入り坐せぬ樣尻久米繩を其の御後方に控渡し給へ

天太玉命

心得申して候

興臺産靈命

天兒屋根命に申し候

汝命は言葉麗しき方なれば岩屋戸の前に進み侍りて布刀詔戸言を禱白し給へ

天兒屋根命

心得申して候

興臺産靈命

手力雄命に申し候

汝命は力の强き方なれば御戸の掖に隱り立ちて若しも大御神天岩屋戸を細めに開き給ひなば御戸を開き御手を取りて迎出し奉り給へ

手力雄命

心得申して候

興臺産靈命

天鈿女命に申し候

汝命は女神なれとも諸神に秀て强悍猛固の方なれば天香具山の眞辟葛を以て鬘と爲し蘿葛を以て手繦と爲し竹葉飲憩木葉以て手草と爲し手には鐸を着けたる矛を以て天岩戸の前に於て誓槽覆て蹈登杼呂許志神懸爲て胸乳を探出し裳緒を番登忍垂し巧に歌ひ舞爲し給へ

天鈿女命

心得申して候

八百萬神

○大神に申し候

興臺産靈命

抑も何事にて候

八百萬神

餘の義に非す大神は諸の神に秀て此の度の神議事を爲し給ひしに依り大神の功績を稱讃して八意思兼命と御名を奉り申すなり

興臺産靈命

忝く候然れば諸神等今よりも岩屋戸の前を差して急ぎ申さん

八意思兼命

急き候得者岩屋戸の前に到着て候今より常世の長鳴鳥を集へて鳴かしめ庭燎を擧げて各々着座爲し給ひて遂次行事を爲し給へ

八百萬神

心得申して候

天太玉命

奉幣　（但祭式に準す）（此間奏樂）

八意思兼命

岩屋戸の前に進み出て拜を爲す（但祭式に準す）（此間奏樂）

天兒屋根命

太刀詔戸言奏上　（但祭式に準す）

天手力雄命

岩屋戸の前に進み出て拜を爲し終りて岩戸の掖に隱る（但祭式に準す）（此間奏樂）

其他の諸神逐次に右に準じて拜を爲す　（但祭式に準す）（此間奏樂）

天鈿女命

岩屋戸の前に進み出て拜を爲す（但祭式に準す）終りて起立し歌舞を奏す（此間奏樂）

歌舞の間諸神同音にて歌を奏す

其歌は

そろへて並べて齋廻り更にたねちらさず

祀ひたさめて心しずめていのる

此の歌舞終りて鈿女命岩戸の前に進みて俯伏せて奏す

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬

天照大御神

天岩戸を細めに開きて内より告り給ふ

吾が隠坐すに因りて高天原自ら闇く葦原中ツ國も尚闇けんと思ひしに何由以て天宇受賣は樂し亦八百萬神諸咲ふぞ

天鈿女命

大御神に益りて貴き神坐すが故に歡喜咲樂び申す也

天手力雄命

其扉を開き大御神の御手を取りて迎出し奉り新殿に遷坐し奉る

八意思兼命を始め諸神皆平伏す

此時の歌

阿波禮　阿那於茂志呂　阿那多能志　阿那佐夜憇　飲憇

思兼謀事のなかりせば

天の岩戸は開けざらまし

天兒屋根祝詞の功なかりせば

天の岩戸は開けざらまし

太玉や太刀玉串のなかりせば

天の岩戸は開けざらまし

天鈿女行事ごとのなかりせば

天の岩戸は開けざらまし

手力雄力の功なかりせば

天の岩戸は開けざらまし

石凝姥鏡の功なかりせば

天の岩戸は開けざらまし

玉の祖玉の功なかりせば

天の岩戸は開けざらまし

目一箇や鐸の功なかりせば

天の岩戸は開けざらまし

長白羽、津咋見の和幣なかりせば

露光量違いの為重複撮影

天の岩戸は開けざらまし

一同二拜二拍

久方の天の岩戸の夜神樂わ

あけて目出度や面て白さよ

神の子が齋の鏡手に持ちて

參れば開く天の岩戸よ

八重垣

露光量違いの為重複撮影

天の岩戸は開けざらまし

一同二拜二拍

久方の天の岩戸の夜神樂わ

あけて目出度や面て白さよ

神の子が齋の鏡手に持ちて

參れば開く天の岩戸よ

八重垣

掛麻久毋畏伎大神の大前に進み出たる吾々は國津神大山津見神の子僕が名は足名椎妻が名は手名稚女が名は
奇稻田姫と申すなり
吾々二人の間には本より八稚女ありしを高志の八俣大蛇年毎に來りて七人迄は喰み取られ殘る此の姫も其採
らるゝ時機來りぬれば吾々親子の者共に歎き申すなり
詞にて翁
豫て汝も承知の通り本年も最早大蛇の來る時機なれば此の娘も大蛇の餌食となるは必定なり然れども大蛇
の餌食にするは殘念なり何か娘の命の助かる樣な好き工夫は出さるか
嫗
何とて好き工夫も坐ささず最早吾々の力にては娘の命の助かる樣も更にありませぬことに女の事なれば何
卒男の考にて好き樣に賴み申します
翁
然れば素より我が國は國は神國道は神道吾々は神の子なれば今より天神地祇に娘の命の助かる樣共に祈
請奉るの外は別に好い考へはないと思ふが如何
嫗
其れは誠に好き考なり然れば吾々は親子相共に天神地祇に御願ひ申しませう

翁

然れば共に芝柴の庵に立歸り天神地祇に祈請奉るなり

此乃御山乃底津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知里天鎮座掛麻久毋畏伎大神乃大前乎慎美敬比拜奉里天舞出たる某は天神七代の末に當りて伊弉諾命筑紫日向之橘の小門の檍ケ原にて禊祓し給ふ時に成生せるは天照大御神次に月讀命其次に現るる建速須佐之男命とは某なり

某此の處に舞出し事餘の義に非ず高天原に於て姉天照大御神と劍と玉との誓約を爲し吾勝ちければ其の勝佐備に畦放知溝埋女樋放知敷蒔伎串刺生剝逆剝許々太久の罪を犯しければ天照大御神は怒り坐して天岩戸を閉じて許母理座しき即高天原は皆闇く葦原中ッ國は悉に暗し此處に八百萬神等天安之河原に神集に集坐して神議事を爲し給ひて天照大御神を招請坐せ奉り然して後八百萬神共に議りて某に千作置戸を負せ亦鬚を切り手足の爪をも拔かしめて神避追比申しければ止むを得ず是より根堅洲國を差して急ぎ下り申すなり

吾斯く神避追はれて出雲國肥の河上なる鳥髮地に降り申して候不思議なる哉河上より箸流れ來りけり是を考ふるに此の河上に人の住家あるに相違なし然れば今より河上を尋ね上り申すなり

尋ね上りて見れば少き芝柴の庵の其内に翁媼間に童女を連れて撫でつゝ泣き悲めり汝等は誰にて其の哭く故は如何

答へて曰く

吾々は國ッ神大山津見神の子なり吾が名は足名椎妻が名は手名椎童女の名は奇稲田姫にて候ふが我が女は元より八稚女ありしを高志の八俣大蛇年毎に來りて喫ひしなり今其大蛇の來ぬべき時なるが故に泣き申すなり

素盞嗚命

然れば其形は如何に

答へて曰く

彼が眼は赤酸漿の如にて身一つに八頭八尾あり其身には蘿又は檜榲生ひ其長は谷八谷峽八峽に亘りて其の腹を見れば每にいつも血あゐ爛れ申して候

素盞嗚命

其童女は汝等の女ならば吾が妻櫛に奉らんや童女の命を助け又七人の女の敵を打ち取り參らするが如何

答へて曰く

仰忝く候然し妻に相談致す間暫く御待ち給はれ

素盞嗚命

心得申した

翁（言葉にて）

斯の如く有難き仰なるが汝は如何に思ふか

媼

誠に仰せ有難き御事でありますから女を差上げ申すに異議はありませぬが何處の如何なる御神樣か存じ申さねば一應御名を御尋ね成されては如何でありますか

翁

其れは好い處に氣が附いた左すれば御名を御尋ね申さう

翁

申し上ぐるは惶れ多けれども我が女を差上申すはいと安き事に候が大神樣の御名を覺り申さず故何卒御名を敬へ給へ

素盞嗚命

吾名は天照大御神の伊呂弟素盞嗚命なり今天より降り坐しつる處なり（と御名乘になると翁夫婦はハッと平伏をして）

翁

斯くも尊き神樣に坐さは恐し差上げ奉る可く候

素盞嗚命

然して吾れに其女を奉るなら親子の別をなして差出せよ

翁

心得申して候

親子共の別れの歌

かそいろは袖に涙をせきとめて
君に捧ぐる櫛稲田姫

素盞嗚命

今より汝等は八鹽折の酒を釀し且垣を作廻し其の垣に八つの門を作り門毎に八の佐受岐を結び其佐受岐毎に酒槽を置きて槽毎に其八鹽折の酒を盛りて待ち居よ然れば某大蛇其の酒を飲み醉伏したる所を退治して見せる故早々願み申す

翁

目度度畏りて候

（翁酒を釀す終りて其の由を言上す）

素盞嗚命

然れば汝は寄しき功を以て八鹽折の酒を釀したるに依り松尾明神と祝ふて參らす爾今酒を釀すものの爲め

害ふ事なく守り幸ひ給へ
翁
忝ふに候
大蛇
（出來り八塩折の酒を飲みて醉ひ伏す）
素盞嗚命
大蛇八鹽折の酒を飲み醉ひ伏し寢たり然れば佩ける十拳の劔を拔て寸斷に切散り申すなり
嗚呼不思議なる哉各寸斷に切散り中の尾に至りし時刀の刃毀ち申して候依て怪く思ひ太刀の先を以て刺割き見れば都牟刈の太刀在り是れを天叢雲の劍と名付け天照大御神に差上け申すなり
然して某は宮造るべき地を求ぎ廻りしに爾に須賀の地に到着たり我心須賀須賀斯依て新殿を造り立籠り申さん
時に此の地より雲立ち騰りければ之に付けて一首詠じたり
八雲立つ出雲八重垣つまごみに
八重垣造る其八重垣を

國

讓

露光量違いの為重複撮影

害ふ事なく守り幸ひ給へ

翁

忝ふに候

大蛇

（出來り八盞折の酒を飲みて醉ひ伏す）

素盞嗚命

大蛇八盞折の酒を飲み醉ひ伏し寢たり然れば佩ける十拳の劔を拔て寸斷に切散り申すなり

嗚呼不思議なる哉各寸斷に切散り中の尾に至りし時刀の刃毀ち申して候依て怪く思ひ太刀の先を以て刺割き見れば都牟刈の太刀在り是れを天叢雲の劍と名付け天照大御神に差上け申すなり

然して某は宮造るべき地を求ぎ廻りしに爾に須賀の地に到着たり我心須賀須賀斯依て新殿を造り立籠り申さん

時に此の地より雲立ち騰りければ之に付けて一首詠じたり

八雲立つ出雲八重垣つまごみに

八重垣造る其八重垣を

國

讓

抑も抑も大神の大前に進み出でたる某は出雲の國の政を致し居る天之冬衣神の子にして大國主命とは吾の事なり

掛麻久母綾爾畏伎大神乃大前に進み出たる両神は天尾羽張之神の子建御雷神次に蓄冉二尊の子天鳥船命とは吾々の事なり

吾々両神是に出ずる事余の義に非す天照大御神の勅を以て豊葦原の瑞穂國は我が子天忍穂耳命の所食國と言因賜しに因り天忍穂耳命天浮橋に多多志而詔り給はく豊葦原の瑞穂國は伊多久佐夜藝豆有祁理と告り給ひ還り上りましき是に天照大御神勅して八百萬神等を天安之河原に神集ひ神議り給ふ時に思兼命の言く此の國には道速振荒振國神等多在ばとて天菩比之命を遣して是を鎮め且又八雲立出雲國大國主命の政を受取り復れと詔りて降し給ひしに大國主命に媚附きて三年を經れども復言奏さず更に天津國玉神の子天若彦命に天之麻迦古弓天之波々矢を賜ひて降し給ひしに大國主命の女下照比賣を娶として八年を經れども復言奏さず又も雉名鳴女を遣し給へども是又復言奏さず爲に此回は吾々両神に出雲國大國主命の政を受取り復れとの勅なり勅の隨に出雲の國を差して天降り申すなり急げば出雲國伊那佐之小濱に降り到着致し候

両神

如何に大國主命に申し候

大國主命

何事にて候

両神（詞にて）

吾々両神は建御雷天鳥船にて候が是迄度々天神の御遣として大神様の御政事を乞受けんが爲めに降されしに未だ復言奏さぬ故に此回は吾々両神に勅して是非乞受け歸れとの事にて候依つて如何御渡し下さい

大國主命

如何にも両神御苦勞でありましたが素より此の國は吾と少彦名命と協心同力して打ち開いた國であるから差上げ申す事は出來ん就ては是迄天菩日命も降り亦天若彦命も降りて來り此國に留りて居つたが又も雉名鳴女が降りて湯津楓の上に居て天神の詔の如く言ふた處が天佐具賣が此鳥の言ふ事を聞いて天若彦に此由を申した處が天若彦は持ちて降りた弓矢を以て射殺した間もなく何號ともなく矢降り來りて天若彦に中りて死した然し此國は殊に住よい國であるから両神も高天原に歸らす此の國に留まつてはどうか

両神

御言葉は有難たうに存じますが吾々は此國に留まることは出來ません尙天つ神の勅なれば是非御渡し下さい其れとも御渡しにならねば鋒先を交へても必ず受取りますが如何に

大國主命

さすれば両神は吾れと神通比較をしてなりと政を受取と云ふ事なれば止むを得ず神通比較を仕る覺悟を致せ

両神

心得ました

雙方とも神通比較の眞最中稻春顎出てて制止し雙方の理由を聞き且大國主命の意見を聞く

大國主命

僕は直ちに答得申さじ我が子八重事代主命取魚しに御大之前に往きて未だ歸り來らす依て御苦勞ながら連れ歸りて呉れよ

稻春顎

心得申しましたとて急ぎ御大之前に行きて八重事代主命に今日の次第を物語り同伴歸宅す

仝

大國主命に八重事代主命と同伴歸宅の旨を告げ尙私も御雙方の中を取り計ひ申度候が一應親子の相談をなし給へと申す

大國主命

されば親子の相談を致す故暫く待ち居り呉れよ

大國主事代主命

親子の相談なし給ふ時に事代主命の曰く此の國は御父上様と少彦名命と共に打ち廣げなされたとは云ふものゝ元は天津神の國なれば高天原に奉りなされて如何で御座いますかと申す依て其事に決し稲春顎の仲裁振を聞く

稲春顎

さすれば此の國は多藝志之小濱に御殿を作り春秋二季の祭を致し且事代主命には葦原中ツ國到る處市町に胡子神と崇め奉らしめ御親子共何の不自由の無き樣に致す事にして御渡し相成りては如何

大國主命

さすれば汝の言葉の通に任す

稲春顎

御両神に申します此度の件に付き只今大國主命に談した通りに取り計ひ申候が如何に

両神

心得ました宜敷頼みます

稲背顎

さすれば御雙方共只今より受取り渡しの式を致します

（三拍三度）

式終りて一同の歌

あらはにの事は大君神事は
大國主の神の御心

終りて大國主命は新殿に入り両神は高天原に歸る

抑も抑も大神の大前に進み出たる某を如何なるものと思召す吾こそわ國ッ神は猿田彦神とは某なり

吾れこれに出で居る所以は天皇孫瓊々杵命天照大御神の勅を受け葦原中ッ國は日向の高千穗の峰奇振の地に天降り坐すと聞きつる故に御前に仕奉らむと存じ候へば是よりも天八衢に暫く間待ち受け申すなり

掛麻久毋畏伎大神の大前に進み出たる自らは天鈿女の命とは妾の事

自らは是に出ずるは余の義に非ず皇孫瓊々杵命天照大御神の勅を受け葦原中ッ國は日向の高千穗の峰奇振の地に天降り坐すと聞きつる故に御前に仕奉らむと存じ候へば是よりも天八衢に暫く間待ち受け申すなり

掛麻久毋綾爾畏伎大神の大前に舞出でたる吾こそは天忍穗耳命の子天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命とは某なり

吾此處に出で來るは余の義に非ず皇祖天照大御神の勅命に依り(三神勅を云ふ)豐葦原の水穗國を差して天降り申すなり

天鈿女命

申し上ぐるは畏れ多けれども皇孫瓊々杵命に申し候大神は此回は天照大御神の勅に依り豐葦原の水穗國に天降り坐す由承り候得者及ばずながら自らに御前拂ひ爲させ給へ

瓊々杵命

忝ふに候さらば前拂を爲し給へ

猿田彦命
出ずる事

天鈿女命
如何に皇孫瓊々杵命に申し候大神の天降りまさんとする時天之八衢に不思議なる神現れたり如何なる神に
候や

瓊々杵命
吾れも相知り申さず汝は手弱女なれど伊牟迦布神と面勝神なり往て問尋ね見よ

天鈿女命
心得申して候
如何に天皇孫の命の降り坐す道に立給ふ神は如何なる神にて候

猿田彦命
吾れは國ッ神名は猿田彦神なり出で居る所以は天神の御子天降り坐すと聞きつる故に御前に仕奉らんとし
て參り向へ侍り申すなり

天鈿女命
如何にも猿田彦神に申し候御身は瓊々杵命の御前に仕へ奉るとの事なれど本より御身は國ッ神我は天神の

事なれば御前へは自らが仕へ奉つるにて候

猿田彦命
然れども其許は女神なり吾は男神の事なれば某が御前へ仕へ奉るにて候

天鈿女命
されど此の八衢迄自らが御前に立ち仕奉りし故是よりも矢張り自らが前拂ひ仕るにて候

猿田彦命
なれども御身は天神の事なれは高天原は好く知りつらん吾は國ッ神なれば下つ國は好く知れる故今よりは
某が御前拂仕る事にて候

瓊々杵命
如何にも両神に申し候
猿田彦の命は男神にて國神の事なれば下つ國への導は汝し爲し給へ天鈿女命は女神にして天神の事なれば
既に八衢迄導きたる事故今よりは供をなし給へ

両神
心得申して候

狂津日之神

道中に出でて荒ぶ

猿田彦命

神德を以て之を鎭める

其時の歌

あら嬉し狂者共を打ち鎭め

今は神國神の世となる

猿田彦命

惡げば筑紫日向の高千穗の峰に到着致して候此の地は朝日の直刺國夕日の日照國なり依て下津磐根に宮柱太敷立高天原に千木高知里天瑞の殿に鎭りまして天下の政を御覽し給へ

瓊々杵命

忝ふに候時に天鈿女命に申し候某が御前に立ちて仕へ奉りし猿田彦大神をば專顯申せる汝送り奉れ亦其の神の御名は汝負ひて仕へ奉れ依て今より汝を猿女君と呼び參らす

天鈿女命

御言葉忝ふに候

瓊々杵命

猿田彦命に申し候御身は某が前拂ひを致したる功により伊勢の國五十鈴之河上に椿神社と祀ふて參らする且天鈿女命を副へて參らする爾今天下の民草を守り給へ

猿田彦命

忝ふに候

瓊々杵命

是よりも瑞の殿に入り申すなり

猿田彦命

瓊々杵命の勅の任に猿女君を伴ひ伊勢國は椿神社に鎭り申すなり

惠比須舞

掛麻久毋綾爾畏伎大神の廣前に進み出でたる某は兵庫の縣攝津國浪速里西の宮に鎭り居る蛭子之命とは吾の事なり

吾此處に出しは外ならず此頃は天が下の蒼生等が心惡しきが故降れば降り續く照れば照り續く旱魃水損計りなれば五穀豊かに稔り申さず是によりて百性等は吾が殿に參り來て五穀の種も盡きたる故何卒授け給へと願ひ申せども素より吾が力に叶ひ申さず就ては今より廣島縣安藝國佐伯郡嚴島に鎭ります七浦胡子神と心を合せ共と出雲國大國主の神樣の御許に參り五穀の種を請ひ受け申さんと候へば出雲の國を指して參るなり

急げば出雲の國小濱に着て候暫く七浦胡子神を待ち受け申すなり

此の御社に鎭り座す大神の大前に進み出でたる吾こそは廣島縣安藝國佐伯郡嚴島に鎭り居る七浦胡子神とは某なり

吾此處に出づるは餘の義にあらず此頃天下の人民の心惡しきが爲め降れば降り續く照れば照り續く旱魃水損計りなるが故五穀豊に稔らず且又種迄も失ひたることなれば吾が殿に參り來て種を授け給へと願ひ申すけれども吾が力にては叶ひ申さず故に兵庫縣攝津國浪速里に鎭ります蛭子の命と力を合せ共に出雲國大國主命樣に五穀の種を請求致さんと思ふ故今より出雲國を指して急ぎ參るなり

急げば出雲國小濱に到着致して候見受け申せば何處の何神樣か知らねども休み給ひける如何にも大神樣の

御名を御聞かせ給へや

蛭子之命

御尋ね下さる某は兵庫縣攝津國浪速里に鎭り居る蛭子之命なるが御身は何處の何神樣に御坐しますや

胡子神

御訊ね下さる某は廣島縣安藝國佐伯郡嚴島に鎭り居る七浦惠比須神なるが大神樣は如何なる理由にて是に御出浮成され候か

蛭子之命

御訊ねの義尤もに候此頃ば蒼生の心惡しきか爲めに降れば降り續く照れば照り續く氣候不順にして旱魃水損計りなり依りて五穀豊に稔らず種迄も失ひ申して候へば吾が殿に參り來て五穀の種を授け給へと申せども吾が力に叶わざる出雲國大國主命樣の御許に參り種を授らんと此處にて休み居りし處なり大神樣は何故ありて御越し成され候哉

胡子神

吾も大神樣と同じ事件にて此處迄來りたり何卒力を合せて大國主命の御許に參り五穀の種を授かる樣宜敷御賴み申すなり

蛭子之命

忝ふに候左れば御賴み申すなり時に大神樣此濱邊を見れば鯛を始め萬の魚澤山居る故に暫し間互に釣を垂れ漁をなし遊び申しては如何に候や

胡子神

好き事に候然れば暫く共に漁を樂しみ申すなり

大國主命

舞ひ出る

両神　詞

此處にて吾吾共釣して遊ぶ所に邪魔なさる御方は何處の何誰で御座いますか

大國主命

我は出雲國大國主命なるが汝等は何處の何神か

両神

攝洲浪速里蛭子之命と藝州嚴島七浦胡子神なり

大國主命

汝　等此處に來りし所以は如何に

両神

餘の義にあらず近頃は天下の蒼生の心惡しきが故降れば降り續く照れば照り續く氣候不順にして旱魃水損計りなれば五穀豊に稔り申さず百性等は吾が殿に參り來て五穀の種も盡きたる故に授け給へと願へども素より吾が力に叶ひ申さず就ては大神樣に御願し五穀の種を授からんと両神共に此處まで來りし次第なり何卒五穀の種を授け給へ

大國主命

吾も亦然り斯の如く思ひて我に近づく者あらば早く五穀の種を授けやらむと思へども未だ好き時なかりしが今日幸汝等が賴む事なれば今より其の種を出す故少し待ち給へ

両神

忝ふに候時に吾々は畏れながら大神樣の御身體に着け給ひ又手に持ち給ふ物に付き御尋ね申して御面倒ながらも御敎に預り度存じますが此の義如何に御座いますか

大國主命

宜しい吾が身に持つものなれば何なりと尋ねて呉れ答へ申す

両神

有難ふ御座います　とて左の物の名稱及び理由を尋ねる

冠　穂　黄金乃丸柞　袋

大國主命

儉約　力行　勤勉　君臣　父子　夫婦　兄弟　其他人道を說きて神德の廣大なることを語る

然れば此の五穀の種を御身等に授くる故此處を始め天が下に至らぬ所なく五穀の豊に牟久佐加に稔る樣播き廣め給へ

神武天皇乃東征

掛麻久母畏伎齋伎奏留大神の大前に進み出たる吾社は彦波瀲武鸕鷀草葺不合命の第四の皇子神倭伊波禮彦之命とは某なり

某は此の處に出で來ること餘の義に候はず天孫降臨以來常に此の國に都しければ西國は既に久しく王澤に浴したれども東國には未だ不平者多く割據して互に相鬩げりと聞く然れども東國に美き地ありて青山四周せりと聞く是れ國の中心ならん以て天業を弘め天下に臨むに足るべしと思ふが爲め伊呂兄五瀨の命と相謀り申さん

神倭伊波禮彦命

如何にも伊呂兄五瀨命に申し候

五瀨命

何事にて候

神倭伊波禮彦命

抑も此の國は天孫降臨以來都せしに依り既に王澤に浴したれど東國には未だ强賊多く割據して相鬩げりと聞く然れども東方に美き地あり青山四周せりと聞く是れ國の中心ならん以て天業を弘め天下に臨むに足るべしと思ふ故に今よりも舟師を率ひて東征致さんと思ふが如何に

五瀨命

御身の申すこと尤もなり舟師を率ひて共に今より出發仕らん然しながら日臣命をも引連れて赴きては如何に候

神倭伊波禮彦命

御言葉誠に好き計ひに候

如何に日臣命に申し候

日臣命

何御用にて候

神倭伊波禮彦命

余の義に非す西國は天孫降臨以來都せしに依り王澤に浴したれど東方には未だ强賊多く割據して相鬪げりと聞く然れども東方に美き地あり青山四周せりと聞く是れ國の中心ならん以て天業を弘め天下に臨むに足るべしと思ふ故に今より舟師を率ひて東征せんと思ふかるが爲め汝も之れに隨行なし給へ

日臣命

目出度仰の隨に從ひ申して候

神倭伊波禮彦命

されば高千穗の宮を出發し共に東方を指して進み申すなり

吾々は高千穗の宮を出發以來豊の國速吸門にて宇豆彦に遇へり海路を知れる故供を申付け槁を以て我が舟に仕へし故槁根津彦と名を授けたり更に筑紫の岡田の宮に一年留り次に安藝國多祈理(埃宮)に七年の間武器を整へ尙進みて吉備の高島の宮に到着致して候へば三年の間此處に止まり舟師を修繕ひ申すなり

抑も大神の大前に進み出でたる某は大和國登美の酋長にして長髓彦とは吾れの事なり

某は天神の子にして先に此の國に入り土人の心を得たまひし饒速日命を奉じて主となし四近を掠め取り惡業を働き居りしが承れば西國より我を攻め來るものある由就ては既に孔舍衛坂に兄猾弟猾八十梟師等を遣ひ申して候が今より要地たる彼の墨坂に兄磯城弟磯城を遣はして之を防がしめんと候へば如何にも兄磯城弟磯城に申す

兩磯城

何事に候

長髓彦

余の義に非らず承れば西國より我を攻め來るものある由就ては既に孔舍衛坂には兄猾弟猾八十梟師等を遣ひ申して候が御身は御苦勞ながら墨坂に赴きて彼の要地を守り給へ

兩磯城

心得申して候　　とて墨坂に赴き待ち受ける

神倭伊波禮彦命

吾こそは吉備の高島の宮に於て三年の間舟師を修繕ひ終りて候へば出發致して浪速を經て河内國白肩の浦に着し進みて龍田に出しも道險惡なりし爲め道を更へ大和の國膽駒山を踰へんとせしも是亦險阻にして此の處には土賊俄に立ち出で向ひしに楯を立て防ぎしに土賊敗す依て此の處を楯津と名附けて進みて孔舍衞坂に差し急ぎ申し候

急ぎ候へば孔舍衞坂に着いて候

時に賊出で來りて戰ふ時に皇兄五瀨命流矢に中りて薨す

神倭伊波禮彦命

孔舍衞坂に於て長髓彦の率ひる大衆と戰ひて利あらず此時に當り皇兄の五瀨命は流矢に當り薨す抑も此の度の敗戰を考ふるに吾れは日神の御子にして日に向ひて戰ふ爲めに不良自今より行廻り日を背負ひて擊たんとして南進し和泉の國血沼の海を越ゑ男之水門に出で草香の津より茅渟山紀伊の國竈山及名草にて諸賊を平げ進みて丹敷の賊徒を擊ち熊野に出で申して候先の頃より氣鬱として徒行に堪へず暫くの間休息仕る

高倉下

呼鳴此の所に寢み給ふ天神の皇子樣に申し候

神倭伊波禮彦命

吾を喚起す者は何者にて如何なる理由なるや

高倉下

吾は此の熊野の里にて高倉下と申す者にて候が此の劍を奉る程に何卒御受取り給はれや

神倭伊波禮彦命

其の劍を奉るとあらば受取り申すが其理由如何

高倉下

其の理由と申するは昨夜「天照大御神建御雷の神に詔り給はく葦原中ッ國は甚く騷し是に於て吾が皇子等危し彼の國は汝の平定し國故に降りて之を鎭めよ爾に建御雷神答へて曰く我降らずとも我が國平げし劍あれば之を下さんと又熊野には高倉下なるものあり之に下して奉らしめなばよからんとて更に建御雷神我に告げて宣く汝の倉の棟を穿ちて佐士布都の劍を下す故に朝夙起きて之を天神の皇子に奉れとの夢を見しに依り」今朝夙く起きて行き見れば此の劍あり依りて只今差上げ申す次第なり

神倭伊波禮彦命

忝ふに候

高倉下

然らば御別れ申さん

神倭伊波禮彦命
斯の如く計らずも劍を授り申しで候が亦も不思議なるかな大空を見れば八咫烏現れ行に從ひ日臣命我を導きしにより大和國宇陀に着いて候依て日臣命に道臣命と名を授け申して候且此の里に於て兄猾弟猾の强賊を平げ更に進み忍坂の大室に到り國見岳の八十建を八十膳夫をして討たしめて漸く此の墨坂に到いて候遙に見ゆるは兄磯城弟磯城の砦ならん彼を差して急ぎ申さん
急ぎ候へば砦の前に着いて候
如何にも兄磯城弟磯城に申さん
次に掛合を致し戰ひて打殺す時
饒速日命
如何にも天神の皇子に申候
神倭伊波禮彦命
何者なるぞ
饒速日命
某は天神の皇子饒速日命なるが今迄は長髓彦に奉じられてありしも皇軍正義なるを悟り長髓彦を誅して參り申して候へば何卒御許しありて御供なさせ給へ

神倭伊波禮彦命
汝降參するとあらば許して參らさん是よりも畝傍山の東南橿原に行き天津日嗣の大禮を行ひ申さん

熊襲征伐

抑も大神の御前に進み出でたる吾社は神倭伊波禮毘古命より數へて降る事十二代に當らせ給ふ大帶日子淤斯呂和氣の天皇の第三の皇子小碓命（亦の名は倭男具那命）とは某なり

某此の處に進み出ずる事餘の義に非らず父天皇は前の頃十二年に熊襲叛きしかば親ら之を征伐爲し給ひて十九年に京師に歸り給ふ然るに二十五年即ち本年亦も熊襲叛むきしかば吾年十六にして建く荒き情なるが故父天皇は之を征伐し亦出雲建をも誅戮せよとの勅なり爾に姨倭比賣命の御衣裳を給はりて候へば之を携へ小劍を懷にし勅の隨に熊襲を差して急ぎ降り申すなり

急げば熊襲に到着致し申して候之よりも女服を着け童女の姿となり暫く樣子を伺ひ申すなり

抑も大神の太前に進み出でたる某は熊襲の酋長川上梟師とは吾れの事なり

吾社は此の處に進み出ずる事余の義に非らず前の頃は熊襲に蔓延り皇命に叛ましかば時の天皇御親征に相成り爲めに一時降參致したるも亦も一族の勢強くなり此九州には我より强きものも無く大逆無道を働き申したり幸に此回岩屋を築き申して候依て上棟式を行はんと思ふ故手下の者に申し付け酒宴の用意を致させ申すなり

川上梟師（詞にて）

如何にも手下の內にて否起、橫辰此の處に出で來れ

手下

心得ました

川上梟師

汝等を喚び出すは余の義に非ず吾が一族と申するは一度天皇の御親征に相成り一時降參したれども亦も勢強くなり九洲には我より強き者なく大逆無道を働き申したり幸に此回岩屋を築き其の上棟式を致さんと思ふなり汝等は手配致し其れそれ酒宴の用意を致し呉れよ

手下

仰せ畏まりました

買ひものに行く途中歌を讀む

用意調ふ

一同

酒宴

小碓命

案内を乞ふ

岩屋

内より答へ名及其事情を聞く

小碓命

抑も妾は笠沙の里の八百屋店の娘にて產名姫と申すものなるが姨の里に參らんと我家を立ち出で申して候に此の山中に迷ひ込み日に行き暮れて候へば人里に出づる事も相叶はぬ此の處の燎を便りに尋ね來りて候故何卒一夜の宿を貸して給へ尙ほ見受け申せば酒宴と打ち見ね申してて候へばいたらぬものなれど何卒御酒の酌を成させ給はれや

手下

右の次第を川上梟師に申し上ぐ

川上梟師

左樣かさすれば一夜の宿を惠みてやれ且御酒の酌をもなさすがよい若し手向ひ致したとて女一人のことなれば恐れることはないくるしくない通せ

手下

酒宴の席に通す

川上梟師

宴酣にして其座に寢むる

小碓命

此の時に乘じ懷より小劍を取り出し梟師の胸元より刺し通す

川上梟師

吾れ武力國中に冠たり好く當るものなし然れども武力皇子の如きものを見ず希くば尊號を奉らん今より日本武の命と稱へ給へと言ひ終りて死る

小碓命

手下を悉く征伐す

日本武尊

熊襲をば退治致して候へば今より出雲の國に參り出雲建を征伐仕り申すなり

急げば出雲の國に着いて候承り候へば出雲建は力強きが上に名刀を携へ居る由に候へば木刀を製し計略以て交換し安安と退治致さんと候然れば今より木刀製造に取り懸り申すなり

漸く木刀も製し終りぬれば今より岩屋を差して尋ね參るなり

尋ね廻りて候が此の砦こそ出雲建の住家なるらん

如何に此の内に案内申さん

出雲建（詞にて）

案内の聲確かに聞へたり如何なるものが尋ね來りしか

日本武尊

某は此の國の者なるが未だ名を揚ぐる程の者にはあらざれど元より角力の好きなものなり承れば御身角力の達人と聞く故に尋ね參りて候へば何卒一手指南をなし給へ

出雲建

さすれば平素の稽古場なる沖の川原にて一手指南して參らする（さりながら此の名刀は携へ行く）此れに通り給へ

急げば川原に着いたり此の處に於て指南して參らさんが劍の必要なし互に此の岩の上に置きて勝負せん

日本武命

心得申したりとて木刀を岩の上に置く

双方

角力を行ふ

日本武命

角力中隙を見て出雲建を川中に投げ込み彼れが劍を取り拔刀に及びて曰く我を誰と思ふぞ畏くも時の朝廷大帶日子淤志呂和氣天皇の第三の皇子日本武命なるが此度は汝の惡業を働き萬民を苦むるが故勅に依り征伐に向ふたり覺悟に及べ

出雲建

ははあ御身は時の帝の第三の皇子日本武命にて候か見受れば年も若きものなれど手向ふとあれば某が名刀を抜刀に及び剣の錆にして参らさん

と云ふて剣を取り抜かんとして案外す

日本武命

建狼狽致すな其の理由を語り聞かさん汝は元より強力無雙の者且名刀を携へ居る故を聞き木刀を製し計略を以て汝の名刀は只今奪ひ取つたぞ斯くなる上は汝の名刀にて汝の首を受け取り申すなり向に立ちて勝負仕らん

出雲建

斯くの如く計略に係りし事の殘念さ此の上は仕方なし此の木刀を以て立合ひ勝負仕らん

日本武命

呼鳴嬉しや出雲建の携へし名刀を以て彼を打ち殺し申して候　此の時の歌に曰く

やつめさすいづもたけるがはけるたち

つづらさわまきみさなしにあわれ

抑も某は是よりも朝廷を差して復奏仕らん

日本武命乃東夷征伐

掛麻久母綾爾畏伎大神の大前に進み出でたる吾社は大帶日子淤志呂和氣天皇の第三の皇子日本武命とは某の事なり

某此の處に進み出でたるは餘の義に非ず前の頃は勅命に依り熊襲及び出雲建を退治致して候に此度東夷に土賊徘徊して大ひに皇命に叛きければ亦も之を征伐せよとの勅命なり其れに付ては吉備武彦及び大伴武日を附副へ給ひき是に我妃弟橘姫を引連れ主從共共京師を發し第一に伊勢の大神宮に參拜致し武運長久を祈り又姥倭比賣命に暇乞を仕らんと思ふ故伊勢の國を差して參るなり

京師を離れて伊勢の國太廟に到着致して候へば暫くの間武運長久を祈り申すなり

倭比賣命

此の御社に參拜致すは日本武命にては坐しまさぬか

日本武命

御言葉の通り日本武命に候が此度は東夷に土賊徘徊し勅命に叛むきければ之を吾れに征伐致せとて吉備武彦大伴武日を附副へ給ひしに依り東夷征伐に赴く事なるが故に姥上樣に御暇乞仕る事にて候

倭比賣命

汝東夷征伐に赴く事なれば神代より傳はる天叢雲の寶劍と火打囊とを授け參らする故に慎みて怠り給ふことなかれ汝が凱旋するまでは晝夜常に武運長久の祈禱を致すなりさらば早々急ぎ給へ

日本武命
忝ふに候然れば今より東夷を差して降り申すなり
伊勢國を發して遙に距れて駿河に到着致して候
時に土賊出ず
如何にも土賊に申さん汝等は惡業を働く故征伐に向ふたり覺悟を致せ
土賊
詐りて降參し獵を致さんと誘ひて野原に到り四方より火を放つ
日本武命
天叢雲劒を拔きて火道の草を薙き燧を讃て火を縱つ會大風起りて反て賊を燒さ拂ひ爰に平く是に依りて此寶劍を草薙の劍と名を改め申す是より相模の國を差して進みけるなり
漸く相模國浦賀に着いて候海上隔てて上總國布津に渡らんと思ふ時に船人に申し候
船人
何御用に候
日本武命
汝等は御苦勞ながら今より上總國布津に渡し呉れよ

船人
心得まして御座いますさらば此の船に御乘り下さい
歌　あひはせなんだか喜望峰の沖で
丸に二引の帆かけ船
鳥も通はぬ玄海灘で
誰に言傳けうこの消息
沖の極際のに白帆が見ねる
あれはもろこし貢船
沖にて難船
弟橘姫
妾御子に易りて海中に入り申す御子は勅命を終へて復言を成し給へ「此の時菅疊八重、皮疊八重、絁疊八重、
重を波の上に敷きて其上に坐し海底深く沈み申さん
時の歌
さねさしさがむのをぬにもゆるひの
ほなかにたちてとひしきみはも

露光量違いの為重複撮影

船人　呼嗚不思議なことには姫君海中に沈み給ふと直ちに暴風止みて波靜まりたりいたわしきは姫君なりかく波靜になりたれば急ぎ遣ぎ申すから暫く辛抱なして下さい

船人　急げば早いもの上總國布津に着きましたから御上陸下さい

日本武命　船人に別れて土賊征伐に赴き申す

某も彼方此方と東夷を鎭定致し申しては漸く信濃國碓氷峠の頂に着いて候が遙に東南を眺むれば弟橘姫海底深く沈みし所見ゆ誠に哀悼に堪へさる余り「アヅマハヤ」と云ひて近江の國を差して急ぐなり

急げば近江の國膽吹山の麓に到着致して候承れば大蛇棲息致し萬民の者を惱ます樣子なり山中に入り大蛇の出て來るを待ち受けて退治仕らん

大蛇　出でて日本武命と戰ふて死す

日本武命　大蛇をば目出度退治致して候が毒氣に罹り申して候へば一先づ都を差して歸り申すなり

神功皇后三韓征伐

露光量違いの為重複撮影

船人　呼嗚不思議なことには姫君海中に沈み給ふと直ちに暴風止みて波靜まりたりいたわしきは姫君なりかく波靜になりたれば急ぎ遣ぎ申すから暫く辛抱なして下さい

船人　急げば早いもの上總國布津に着きましたから御上陸下さい

日本武命　船人に別れて土賊征伐に赴き申す

某も彼方此方と東夷を鎮定致し申しては漸く信濃國碓氷峠の頂に着いて候が遙に東南を眺むれば弟橘姫海底深く沈みし所見ゆ誠に哀悼に堪へさる余り「アヅマハヤ」と云ひて近江の國を差して急ぐなり

急げば近江の國膽吹山の麓に到着致して候承れば大蛇棲息致し萬民の者を惱ます樣子なり山中に入り大蛇の出て來るを待ち受けて退治仕らん

大蛇　出でて日本武命と戰ふて死す

日本武命　大蛇をば目出度退治致して候が毒氣に罹り申して候へば一先づ都を差して歸り申すなり

神功皇后三韓征伐

掛麻久母畏伎御社爾鎮座奴大神の大前に進み出たる此の神は國神猿國彦神とは某なり

某是れに出ずるは餘の義にあらず時の帝帶中日子之天皇の皇后息長帶比賣命は熊襲叛逆する事は金く三韓の後援なりと宣ひて自ら弓矢を御手に取り遊はして異國三韓御征伐の由承り候故御軍の前拂ひを致さんと思ふ故之よりも備前の國の港を差して急ぎ申すなり

急げば備前の國の港に着いて候へば暫く皇后樣を待ち受け申すなり

掛麻久母畏伎大神の廣前に進み出でたる某は人皇八代皇元天皇の曾孫にして比古布都押之信命の子にして第十四代帶中日子天皇に仕へ奉る武內宿彌とは某なり

吾れ此の處に出ずるは余の義にあらず仲哀天皇の皇后息長帶比賣命は女体ながら弓矢を御手にとり遊ばして三韓御征伐の途につかせらるる事なれば身の裝ひを爲さる其の間待ち居り申すなり

掛麻久母綾爾畏伎此之神社爾齋伎鎮座奴大神乃廣前に進み出でたる自らは時の帝帶中日子天皇の皇后息長帶比賣とは自らの事

自らは此の處に出ずるは餘の義に候はず時の帝の二年には熊襲叛逆するが爲め長門の國豐浦に至り更に筑前の香椎宮に在りて戰へども皇軍利あらず九年の春二月帝軍中に崩去なし給ふ故に河內の國惠我長野陵に葬り奉り後神敎を得て武內大臣を始め諸臣と謀りたるに熊襲の叛くは是れ全く三韓の應援なりさらば是より征伐の爲め女體ながら弓矢を手に取り男の裝をなし舟師を率ひて三韓差して急ぎ申すなり

武内宿彌

如何にも息長帶比賣命様に申し候此の度の三韓御征伐の御供仕らんと此處に相待ち申して候

息長帶比賣命

されば萬事宜敷取計ひ成し給へ

武内宿彌

如何に命様彼れを御覽し給へ御船の舳先に奇なる神現れ給ふ如何なる神にて御座しますや

息長帶比賣命

自らも相知り申さぬ汝近寄りて尋ね申せよ

武内宿彌

心得申して候如何に命の乘り給ふ御船の舳先に現れ給ふ神は何神にて御座しますや

猿田彦神

呼鳴某は天地の始めの時に國常立之命と現れ申したるも某なり又日の神の道を敬ひ敬ひ申して土君なるが故に大田之神と名乘るも某なり根之國底之國に於て見ざる云はざる聞かざるの渾沌の始めをなしたるが故に氣之神と名乘るも某なり道の辻に立ちて塞の神船中に船玉之神鹽濱に於て鹽土老翁之神と申すも某なり今日此の御社殿に現はれ申しては國ッ神猿田彦神とは某なり承はれば息長帶比賣命は三韓御征伐の由吾れ

素より導きの神なれば海上の導き仕奉らんと暫し相待つて候

武内宿彌

忝ふに候

如何にも命様に申し候只今御聞取りの通りに候

息長帶比賣命

承り候されば猿田彦神様宜敷導き御頼み申し候

猿田彦神

心得申して候さらば御船の舳綱解き放ち此の港を立ち出で申さん時の歌に云はく

立ち揃ふ濱に島松植並べ
神をば祝ひ奉るなり

猿田彦神

急き候へば眞金吹く吉備の前の國或る濱に着いて候此の所に牛の頭に似たるもの御船に災を爲し候へば吾れ神德を以て鎭め申して候依て此の處を牛窓と名付け置くなり

牛窓港を立ち出でて眞金吹吉備の後の國の或濱に着いて候此の處に於て御船の舳綱を繫らせ給ふ故鞆の港と名付け置くなり

鞆の港を出でて同じ國は尾道に着いて候命樣は此の度は大戰の事なれば自力にては叶はぬとて龍宮の大神に御酒獻上なされて候へば滿潮干潮の珠を得られて候依て花の尾道玉の浦と名附け置くなり

尾道を立ち出でて同じ國の或る濱に着いて候御船の水盡き申して候へば此の處に井戸を堀り又釣瓶の綱として糸を縒らせ給ふ故に水調ふにより御調郡糸を縒らせ給ふに依り糸崎深き井戸を堀らせ給ふに依り長井の浦と名付置くなり

絲崎を立ち出でて八束穗の足穗の安藝の國祝田の豐田の郡能地の濱に着いて候が此の度は大事の故を以て自力にては叶はずとて海津見の神に御酒獻上なされて候此の時鯛悉く此の酒を服し醉ひて浮き流れて候依て浮醉明神俎神社と祭り置くなり

能地を出發致して同じ豐田の小島に着いて候命樣は此の島に御上陸成され御手を洗はせ給ふに依り御手洗島と名付け置くなり

御手洗島を出發致して同じ國廿日市に着いて候此の所に於て天神地祇を祭り御酒を樽の儘獻上致され武運長久を祈られ候により廿日市樽ケ鼻と名付け置くなり

廿日市を出でてより筑紫の國筥崎に着て候命樣は胎内に皇子籠らせ給ふ故凱旋の曉き迄御誕生遊ばさぬ樣天神地祇に祈請し弓にくらべて木綿を七尺五寸に截り御肌に結び且石を取りて腰に挾み給ふ是れ皇國の石肌帶の始めなり此の時の歌

人知らぬ肌わに結ぶ石肌帶
心苦しや月をまつかな

右の歌を讀み終りて出發す

急ぎ候くば津島の鰐津に着いて候是れより三韓差して風の隨に流しけるなり

順風の隨に三韓の沖合に着いて候遙か彼方を見れば三韓大王は海に諸船を浮べ陸に大軍を備へ我が軍を待ち受けると見わにける此の時皇后樣干潮の珠を投げ給ふ故に大海は干潟と相成りしが彼の軍兵は皆徒行にて我が船に攻め寄する進みて深きに臨みし時滿潮の珠を投げ給ふかるが爲め敵軍皆溺死せり然れども沖の大船に大王依然として構へたり

如何に皇后樣に申し候

息長帶比賣命

何事に候

猿田彦神

皇后樣は今より御弓を持ち彼の大王を射取り給へ

次に武内大臣に申し候

武内宿彌

何事にて候

猿田彦神

某は此の綱を持ち神通にて彼の大王の乗りたる船に飛び渡り申す故其許は綱の端邊を持ちて大王を捕縛たまへ

武内宿彌

心得申して候とて終に大王を生擒にす

猿田彦神

如何に大王に申す

大王

何事なるか

猿田彦神

日本の國に服從ひ申すか服從ひ申せば御馬飼として許して遣はす若し服從はざれば命を取るが如何か

大王

命を助けやるとの事なれば御馬飼となりても服從ひ申す然る上は令ひ太陽西より出で鴨錄江の水が逆に流るるとも毎年船雙べ船腹乾さず梔櫼乾さず天地共に降りなく金銀綾羅八十艘を朝貢仕る事にて候

武内宿彌

是よりも三韓の中に日本府を置き政事致す故是に叛く事相成申さん

大王

心得申して候

武内宿彌

されば是よりも御國を指して歸朝仕る故皇后樣を海邊迄で御見送り致せ

大王

仰に從ひ海邊迄で御見送申すなり

蘇我入鹿誅戮

抑も大神の廣前に進み出たる吾こそは時の帝人皇第三十五代皇極天皇に仕奉る我が祖先を申せば人皇第八代孝元天皇の曾孫大臣武内宿彌の子石川より蘇我を名乗り出で其後裔蝦夷の子大臣蘇我入鹿とは某なり

吾こそは父に繼ぎて大臣奏職するや父に優りて專横を極め父蝦夷の宅を宮門と云ひ已の宅を谷宮門と名付け吾子を玉子と呼び出入する時は兵士をして護衛せしめ僭越の極に達し申し候最早三韓より入貢の日近附申したれば部下に命じて大極殿に其の準備を致させ申すなり

掛麻久母畏伎大神の廣前に進み出でたる吾こそは時の帝に仕奉る人皇第三十四代舒明天皇の子中大兄皇子とは某なり

吾こそは此の處に出しは余の義にあらず蘇我入鹿と申するは暴横一方ならず公民を使役して父子の墓を築きて陵と稱し天子が祖宗を祀らせ給ふ式を以て己が先祖を祀り已が家を御門と唱へ已が子を王子と云はしめ柵を構へ兵を備へ出入を護衛せしめ亦蘇我氏の出なる大兄皇子を立てて皇嗣とせんと思ひしに是時聖德太子の御子山背王賢明にして天下望を屬せしを以て之を忌み且除かんと謀り兵を遣はして王を班鳩宮に殺し奉り以て其の暴横は極りなし故に天皇の三年三韓より朝貢の日を以て此を誅戮致さんと候へば豫て申合せ居る中臣鎌足蘇我石川麿佐伯子麿葛城網田等の出來るを待ち受け申すなり

抑も大神の大前に進み出たる吾こそは時帝に仕奉る我祖先を申せば天兒屋根命より二十一世の後裔御食子の大連公の子中臣鎌足とは某なり

吾社は此の處に出で來るは余の義にあらず時の帝皇極天皇に仕奉る蘇我入鹿及び其父蝦夷の專横は言語筆紙に盡し難く殊に山脊王を殺し奉りしは大逆非道なり然りと雖も其の勢强き爲め誰一人として之を咎むるものなし適法興寺に於て蹴鞠の事あり時に中大兄皇子の沓誤りて脱げしかば某參ひて皇子に奉りしより親くなり互に其志を明し南淵先生に書を學ぶとて車中に密議を致し申し候へば最早三韓より朝貢の日近く相成りたれば中大兄皇子の御許を差して急ぎけるなり

急ぎ候へば中大兄皇子の御許に到着候如何に中大兄皇子樣に申し候

中大兄皇子

御苦勞に候豫て協議致したる通り三韓より朝貢の日も本日となり殊に蘇我石川麿は入鹿の命により朝貢の表文を朗讀することとて事の內容を申含め置き候へば吾々は大極殿を差して急ぎ申すなり

急げば大極殿に到着て候へば暫し身を隱し時機の至るを待ち受け申すなり

抑も大神の廣前に進み出たる吾社は時の帝皇極天皇に仕奉る我が祖先を申せば人皇第八代孝元天皇の曾孫大臣武內宿彌の子石川より蘇我の姓を名乘り出て其後胤倉麿の子石川麿とは某なり

吾社は中大兄皇子の命により從兄なれども專横の振舞を致す入鹿を誅戮致さんと候殊に此度は時社よけれ入鹿よりは朝貢の表文朗讀を命せられたり依りて大極殿指して急ぎ申すなり

急げば大極殿に到着て候如何にも入鹿大臣樣に申し候

蘇我入鹿（詞にて）

呼嗚汝は石川麿なるか今より直ちに朝貢表文朗讀に取懸れ

表文

金

銀

稜羅

彩色の具

右の品船八十艘に積載して朝貢致し候

三韓國王

日本國王

中大兄皇子

表文朗讀終らんとするとき俄に入鹿を背後より槍にて突く

蘇我入鹿

畏くも大極殿に於て我に暴行を加へるとは何事なるか

中大兄皇子

汝天宗を滅し日嗣の位を傾けんとす豈天孫を以て入鹿に代ふべけんや

如何に鎌足首を打取り申せ

中臣鎌足

心得申して候

如何中大兄皇子其他の方々に申候目出度入鹿誅戮致して候へば皇子亘勢徳太古を將とし兵を遣し蝦夷が宅を圍み悉く誅伐致し給へ

入唐事蹟

抑も此の處に進み出たる吾こそは唐第一代高祖神堯皇帝より第六代玄宗明皇帝の臣下にして營洲の雜胡より出で一身を以て平蘆范陽河東の三節度使を兼務致し居る安祿山とは某なり

某は此の處に出ずること餘の義にあらず抑も唐の國は東洋文明の淵源地なるが故に諸外國より入唐致し此國の文學を學び歸る者數多し是を遣唐留學生と申す中にも日本の國より多大なる留學生入唐致す故其接待官を命ぜられて候へば今より留學生を待ち受け申すなり

掛麻久毋畏伎大神の廣前に舞ひ出たる吾こそは人皇第四十四代元正天皇陛下に仕奉る中務の大輔安部船守の子にして安部仲麿とは某なり

某は此の處に出ずること餘の義にあらず如何なる御用かわ知らねども時の帝より登殿致せとの詔に候へば身仕度致し是よりも參內仕るなり

畏れ多くも元正天皇陛下に謹みて申上候詔の任に答殿仕りて候が御用命如何に御座します

元正天皇

汝を是處に喚び出すは餘の義にあらず我が國には固有の文學あれども未だ輸入の文學少き故教育發展致さず就ては唐の國は東洋文明の淵源地と聞く汝往きて是を學び歸り我國文學の向上發展致す樣其任務を命ずる程急ぎ入唐致し文學を勉學致し申して歸國仕れ

阿部仲麿

詔の隨に目出度畏り申して候されば今より多治比縣守及び僧玄昉と共に唐の國を差して渡航仕るなり
順風の隨に海上無難にて唐地に上陸致して候へば四百餘洲の都を差して參りけるなり
漸く都に到着候如何に留學生の接待官に申し候

安祿山

接待官と案内ある方は日本の人と見受申して候が其御名を聞かせ給へ

阿部仲麿

御訊ね下さる吾こそは日本の國時の帝第四十四代元正天皇陛下の詔を奉じて入唐致したる遣唐留學生阿部仲麿と申す者なり萬事よろしく御賴み申し候

安祿山

心得申して候吾元より接待官にて安祿山と申す者なり此の國には博學多才なる李太白、王維、杜甫、楊國忠、不肖ながら某も留學生に對し懇切に教授致す事に候へば其の手續を致し參らする又此の國に圍碁と申すものあり勉强の餘暇に之を娯樂となす風習なり依て御身も之を習ひ見給へ時に御身の如き學生には是より百間降りて三十間の高樓館あり之を凌雲閣と云ふ是れ寄宿舍に候へば是に參り休み給へ吾今より案内仕る御通り候へ

阿部仲麿

添ふに候

安祿山

凌雲閣に着いて候されば今夜御休み候へ明朝面會致す事に候

阿部仲麿

吾も入唐以來長の星霜を重ね此の國の文學修了致して候へば玄宗明皇帝の御意に叶ひ引上げられて左輔闕の官を授けられ名を改めて朝衡と申し居り候が歸國致さんと遣唐使清河に連れられ明洲の港より船に乘り出船致せしに途中にて難風に遭遇し安南國に漂着致し候へば遙に東の空を眺むれば月輝き出ずるは三笠山を登りし月ならん我が國の事を思ひ一首詠じたり

天乃原ふりさけ見ればかすがなる
三笠の山に出し月かも

と詠じ亦も此の國に留り遂に今年年七十歳にて病死致すことにて候
掛麻久母綾に畏き此の處に齊き奉る大神の大前に進み出でたる吾こそは時の帝元正天皇陛下に仕奉る吉備眞備とは某なり
先の頃は阿部仲麿其他留學生を派遣致されたるに此の度は吾に遣唐留學生を命ぜられて候へば身仕度致し直ちに唐の國を指して急ぎ申すなり

都を立出てより肥前の國唐津港に到着候此の所の旅館に一泊致さん如何旅館の主に申す

主（詞にて）

答へて吉備眞備公を客間に案内する

抑も神前に進み出でたる妾は先年詔に依り遣唐留學生として入唐致されし阿部仲麿の妻若草とは自らなり

吾が夫仲麿樣は入唐以來何の訪もなく吾れ等親子は雨よ星よと待てど暮せど更に御歸りもなく案じ居る時

に承り候らへば吉備眞備樣は御入唐の爲め肥前の國は唐津港に御着し成され御宿の由自らは此處參りて我

が子滿月丸の書きし此文を夫仲麿樣に屆け貰はんと思ふ故唐津港に急ぎ申すなり

急げば唐津港に着いて候見受け申せば吉備樣は此の宿に御泊の樣子なり

如何宿屋の主人に申す

主人　詞

何方で御座いますか

若草

自らは阿部仲麿の妻若草なるが吉備樣が御泊りなれば何卒面會致させて給はれや

主人

心得ましたとて吉備公に其由を申す

吉備眞備

立ち出で面會して依頼を諾して別れる

主人に出發を告げ船場を指して行く

仝　詞にて

如何に船頭に申す我は吉備眞備なるが入唐致す故急ぎ唐地へ渡して呉れ

船頭

心得ました何卒御乘遊ばせ

吉備眞備

如何船頭の者彼なる處に黑く見ゆるはどこであるか

船頭

あれは小錢と云ふ國であります

吉備眞備

小錢と云ふ國は聞いたことがない

船頭

をーあれは小錢と云ふ國であります

吉備眞備
小錢ではあるまい朝鮮ではないか
船頭
はあー朝鮮朝鮮
吉備眞備
左の沖合に見ゆるはどこか
船頭
あれはをやわんと云ふ島であります
吉備眞備
たやわんではあるまい臺灣であらう
船頭
左樣左樣
如何に吉備樣に申し上げます無事に明洲の港に到着致しましたから御上陸下さい何卒御身御大切の程祈り
ます
吉備眞備

御苦勞であつた汝等身の用心をせよ(とて別れる)
海上何の障りもなく到着致して候へば今より唐の都を指して急ぎ申すなり
急げば都に着いて候如何に留學生の接待官に御賴み申す
安祿山
接待官と御呼びあるは日本の御人と見受けたり如何なる御方に候や
吉備眞備
御訊ね下さる某は日本の國第四十四代元正天皇の下臣にして此度遣唐留學生として入唐致したる吉備眞備
と申す者なり宜敷御賴み申し候
安祿山
心得申して候吾元より平盧、范陽、河東の三節度使を兼務致し且留學生の接待官にて安祿山と申す者なり此
の國には博學多才なる李太白、王維、包佶、揚國忠不肖ながら某も留學生に對し懇切に敎授致す事に候へ
は其の手續を致し參らする又此の國に圍碁と申すものあり勉强の餘暇に之を娛樂となす風習なり依て御身
も之を習ひ給へ時に是より百間降りて三十間の高樓館あり之を凌雲閣と云ふ是れ寄宿舍なり是に參りて休
み給へ吾今より案内仕る御通り候へ
吉備眞備

添ふに候

安祿山

凌雲閣に着いて候されば御休み候へ明朝面會致す事に候

吉備眞備

凌雲閣に寢む

幽靈

出る

吉備眞備

我が枕頭に狼狽騷ぐ其のものは變化か魔王か本性を現はし申せさもなくば打ち拂ひ申すが如何

幽靈

御身知らざるか我が狩衣の袖を見て知り給へ

吉備眞備

「天乃原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも」御身は日本の國は阿部仲麿公にては候はんか其身に成り給ふは何故なるか一々語り聞かせ給へ

幽靈

吾れも入唐以來長の星霜を重ね此の國の文學修了し玄宗明皇帝の御意に叶ひ引き上げられて佐輔闕の官に登用せられ名を朝衡と改め居りしが歸國致さんと遣唐使清河に連られ船にて明洲の港を發し途中にて難船致し安南國に漂着し遙に日本の空を跳めて月の輝き出ずるは三笠の山を登りし月ならんと我が國を慕ひ一首詠じたるが袖の歌に候而して亦も此の國に留り遂に年七十歳にて病死致して候が日本の天皇は何の御障りも御座無く候や又我が妻子は如何消息致し居るや聞かせ給へ

吉備眞備

承り候へば憫はしき事に候御尋ねの天皇は御身健に渉らせられ國内に波風も立たず政を御覽し給ふ續て御身の妻子は無事にて暮し居られ候が一子滿月丸殿より此の文を送られて候何卒讀みて事の樣子を知り給へ

靈魂

添ふに候へど元より幽魂の事なれば眼こそ見ねね讀む事出來ざれど御身より大略聞きつれば安堵致して候今より此の國の物語を仕らん此の國の風習として圍碁と云ふものあり入唐せる留學生には必ず是に交らしめ敗を取れば其食料を減じる惡弊あり依て御身之を致す時は我天より管糸を下して敎へ參らす是に打さ給へ然れば必ず勝つ事疑なし續て耶馬臺の詩と云ふものありこれを讀ませ申すに相違なし其時は某が黃金の蜘蛛となりて敎へ參らさん此の事多くは安祿山の所爲なるが故萬事に注意なし給へ

吉備眞備

數々有難く候吾歸朝の其折は御靈は共に船に乘り歸國成し給へ

靈魂

大略敎へ候へば元の所に鎭り申すなり

吉備眞備

不思議なるかな昨夜は阿郡仲麻公に面會したる夢を見たり夢は元より信ずべきものにあらず譬に夢は五臟の惱どか然れども何事あるやも計られず注意仕らん吾社は長年留學致し既に卒業したる事なれば歸國致度に付き暇乞の爲め安祿山の御許指して急ぎ申すなり

安祿山

急げば都に着いて候如何に安祿山殿に申候

何事に候

吉備眞備

御蔭にて修學致し候へば今より歸國致度就ては御暇乞に參上致して候

安祿山

誠に御身は天晴なる人なり然し乍ら此國の圍碁一回も交り申さず就ては何卒一度交際を成し給へ

吉備眞備

心得申して候

安祿山

御身の圍碁の打方には驚き入りたり實は吾連戰連敗なるか御身は日本の御人なるが故未だ初めてと思ひ黑石を渡して打ち見れば豈計らんや誠に强き御方なり此國にて男子の碁打の大將は張說女にては玄唐の妻劉沙女其他の人々とも交り申せど御身の如き强き方には出合ひ申さず依りて今より詩を掛ける故日本の人なれば和歌を以て答へ給へ

吉備眞備

心得申して候

安祿山

啼鳥春林乃北北林春花乃西西花乃春に花落知天落花乃春鳥會啼久

吉備眞備

北よりも南に通ふ杜鵑

月の出入り山の端に棲む

安祿山

青苔ハ似レテ衣ニ陰ス巖肩ヲ。　白雲ハ似レテ帶ニ廻ル山腰ヲ。

吉備眞備

苔衣着たる巖はさもなくて
衣着ぬ山に帶をするとわ

安祿山

御身は二詩迄も返歌致して候へば此の上は耶馬臺の詩を掛け申す

吉備眞備

心得申して候

安祿山

此詩起りて以來誰とて讀む人無かりしに御身の讀み給ふ事は誠に不思議なり抑も此の詩は古傳說に云はく梁と申せし時代實誌和尙と云ふ高僧あり此の人坐禪の行を致す時或日虛空より天童子降り一字書いて去り又翌日異る天童子變りし一字を書いて去り斯く致す事百二十日にして百二十人の天童子百二十文字を書き去り申して候之を和尙書き殘し今に傳はりしなり吾承るに其の和尙の外讀む人未だ嘗てなし此の讀み方は中の右より出で中の左に讀み終る事に候由是を御身が詳に讀み開き給ふは誠に大學者なり此の人を日本に歸し申すは口惜しき事なり何卒此の國に留りて皇帝に仕へ給へ

吉備眞備

皇帝に仕へる事相成り申さん片時も速く歸國致度くに付き御暇乞にて候

安祿山

吉備眞備殿聞き給へ先の頃阿部仲麿公は此の朝に仕へ佐輔闕の官に登り名を朝衡と改めて世人に高祿太夫と尊稱せられ遂に此地に歿せられたるが御身は此の官以上に登用せらるる樣取計ひ申す故何卒留り候へ

吉備眞備

重ねての御言葉なれど是非留ること相成り申さん今日御別れ申す

安祿山

斯く迄親切に勸告致せども聞き入れざる事なれば某の名刀にて一打に致し申すが如何に

吉備眞備

譬へ一命を果つるとも此朝に仕へる心は更に無し某を打ち取らんとあらば日本の鋭利拔刀に及び汝の生首受取りて歸り申さん承れば逆臣にして唐の朝を傾くる惡心ある樣子生し置く必要更になし天に代りて誅戮致す覺悟を致せ

安祿山

斯く迄惡口雜言致す汝をば只一打ちに致す眞劍勝負を仕らん

吉備眞備

某も漸く詔の任務も果し且成に危害を加へんとせし安祿山も誅戮致して候へば日本を差して歸國仕るなり

一條堀河戻橋乃鬼女退治

掛麻久毋綾爾畏伎大神之御前に慎美敬ひ進み出たる某が祖先を申せば人皇第五十六代清和天皇の第六の皇子一條の大宮桃園親王の御子六孫王經基初めて源氏を名乘り其の子滿仲の嫡子にして時の帝第六十四代圓融天皇に仕奉る上總守源頼光とは吾れの事なり

吾社は人皇第六十一代朱雀天皇の天慶八年七月二十四日攝津の國に生れ幼名を文珠丸と申し年十五歳にして元服致し頼光と名付けられ時の帝に仕奉りては重く用ひられ上總守に任せられ赴任以來星霜を經任滿ちて上洛致せとの詔に依り我が下臣を從へ上洛致さんと候へば今より渡邊の綱に命じ數名の兵を率ひて供を致させ申すなり

如何に渡邊の綱に申し候

渡邊綱

御前に候が何御用に候

源頼光

汝も承知の通り此の度上洛の詔勅下りて候へば用意を致し數多の兵士を率ひて供を爲し給へ

渡邊綱

心得申して候

此の處に齊き奉る大神の廣前に進み出でたる我社は父箕田任の一子にして源頼光の下臣箕田源二渡邊綱と
は某なり
吾れ此の處に出づる事余の義に候はず頼光樣は此度任滿ちて上洛の勅命下りしかば某は卜部次官季國の一
子卜部六郎季武碓氷荒太郎貞道を初め其他の兵士を率ひて御供致せとの仰なり漸く準備整ひ申して候へば
頼光樣の御前差して急ぎ申すなり
急げば頼光樣の御前に登城致して候
如何にも主君頼光樣に申し上げ候

源頼光
何事に候

渡邊綱
余の義にあらず仰の如く準備も相整ひ卜部太郎季武碓氷荒太郎定道を初め其の他の兵士を率ひて登殿致し
て候へば今より御供仕る事に候

源頼光
御苦勞に候されば今より主從諸共に都を差して上洛仕るなり
上總の國を立ち出でて漸く相模の國は足柄山に着いて候如何にも渡邊の綱に申し候此の處を眺むれば不思

議なる哉雲立ち騰りけるが古人の諺に「四方常に大雲ありて五色具り而も雨降らぬ時は其の許に必ず賢人
の隱家ありと」聞く依て汝往いて尋ねて見給へ

渡邊綱
心得申して候暫し御待ち候へ
尋ね來りて見るなれば小さき柴の庵の其の中に老母年の頃二十歳計りの男子を連れ住居致し居る樣子なり
此の內に案內申す

老婆
御前に候

渡邊綱
某は主君頼光樣の命に依り汝等の住家を尋ね來りて候主君の仰には人あれば之を連れ來れとの事なり依り
て今より頼光樣の御供を致させては如何に

老婆
忝ふに候ふが一應我が子に相談致す程暫し御待ち給へ

詞
如何に我が子怪童丸に申す彼の御武士樣の仰には源頼光樣の御供致せとの事なるが汝は如何致すか

有難き御言葉に候兼て我も一度武家に仕へ度く思ひ居りしに遇御尋ね下され其の上に仰の事なれば進みに進みて御供致し度御座いますから母上様宜敷御頼み下され

老婆　さうすれば御供致すがよい

如何に御武士様我が子に相談致し候が快諾致して候へば何卒宜敷御頼み申すなり

渡邊綱　さらば親子共に後に附いて御出で候へ

親子　心得申して候

渡邊綱　我が主君源頼光様に申し候仰に從ひ此なる親子を連れ歸りて候何卒御用仰付け給へ

源頼光　御苦勞に候

如何に老婆に申す汝等は此の深山に住居致すは實に奇怪なり全體何處の何人なるか物語を致し給へ

老婆　御尋ねの義は元より此の幽谷に往居する程の卑しき者故に何處の何者とも我が祖先相分り申さぬ姓名などは更に之れなく候

源頼光　然らば其の子は誰の子なるか父を語り給へ

老婆　誠に恥ながら此の子の父は相分り申さぬ實は吾れ木樵に出で遂に晝寢を致し居りし其の時の夢に赤龍來り吾れと交を結びしと思ひし時不圖目を醒し見れば只一場の夢と思ひ居りしに不思議にも其より懷妊の身となり月滿ちて此の子誕生致して候へば怪童丸と名を附けて育て上げたるに常に吾れに對して孝養致し居り申すなり

源頼光　實に感心の至りなり今より我れが供を致さすべし然れば吾れ取上げて重く用ひて參らすが如何に

親子　諸共に頼む

源頼光

さらば此の處に於て主從の盃を取らす

親子

忝ふに候

源頼光

只今渡邊綱の祝言の内に「公に仕へて時を待つ」との句あり實に感心に候就ては此の子險しき所に住みし故坂田と姓を付け公に仕へて時を待つの文字を取り公時と名付けて參らす

老婆

忝ふに候何卒萬事よろしく御頼み申し候

源頼光

今よりも都を差して急ぎ申すなり

急げば都に着いて候如何に公時に申す汝は下臣の者と共に我が宅に到り道場に於て劍道の稽古を爲し給へ

坂田公時

心得申して候

源頼光

下臣渡邊綱に申す吾上洛するや勅命下り此頃何者の爲す業か夜となれば老若男女の區別なく行衛不明と相

成り上下共に騒ぎ立て居る時阿部晴明の占に依り鬼人の業と判り就ては陽明門を衛り其の証據を確めとの詔り某も四天王を從へ此任に赴かんと候兼て汝も承知の通り一條の大宮に到り此の文を渡し其回答を受取り歸れ然し前申す通り物騒しき時故此の髯切の刀を貸す故身に注意を致し若し危き時は之を以て打ち取り申すべし

渡邊綱

心得申して候然れば今より一條大宮差して急ぎ申すなり

某も主君の命に依り一條大宮に到り用件相終り申して候へば主君の宅を差して急ぎ歸り申すなり

急げば堀川戻橋に歸り申したり不思議なるかな此の夜半に美女一人現れたり女に申す何處の何者なるや

美女

自らは此の都の者なるが騒がしき時の事なれば畏れながら我が宅迄御見送り御頼み申す

渡邊綱

心得申したり案内を致せ

汝は道を左右に致し我を連れ往き申すは何故なるか

美女

吾は愛宕山の鬼人なり汝を連れ歸らんと暫し相待つたり

渡邊綱
呼嗚汝は鬼人なるか名刀にて打ち拂ひ申す
某は名刀にて鬼人の左の腕を打ち取り申して候へば主君頼光様に此の由言上仕るなり
急ぎ歸りて事の様子を一々言上仕れば主君頼光様は鬼人の腕を吾れに與られて曰く我が家に歸り四方に注
連縄を張り天神地祇を勸請し七日七夜の間齋祈禱を致せとの事なり急ぎ我が家差して歸り申すなり
我家に歸り申して候七日七夜の間齋祈禱を仕る

婆（詞）
如何に綱に申す汝は此の間鬼の腕を打ち取りたそうな誠に手柄を致した自らは鬼の手を見るは初めての事
なればどうぞ見せて呉れよ

渡邊綱
養母様の御言葉てはありますが七日七夜の齋祈禱が明日ですみますから明後日迄待つて下さいされば御目
に懸けます

婆
さうすれば見まい又明朝は攝津を差して歸る妾も年老いたる事なれば又逢ふは不定であるから今が此の世
の別れと思ふて呉れい

渡邊綱
さうも仰の事なれば是非なく御目に懸けませう

婆
左様かさらば見せて貰ふとて手を取り眞性を現はし逃げ去る

渡邊綱
あら殘念や腕を取り返されて候へば頼光様に此の申を言上仕るなり

大江山

（千丈ヶ岳）

掛麻久毋畏伎大神之御前に進み出たる我社は祖先を申せば人皇第五十六代清和天皇の第六の皇子一條の大宮桃園親王の御子六孫王經基初めて源氏を名乘り其の子滿仲の嫡子にして第六十六代一條天皇に仕奉る左馬權頭源朝臣頼光とは某なり

吾が故實を申せば人皇第六十一代朱雀天皇の天慶八年七月二十四日攝津の國に生れ幼名を文珠丸と申し年十五歳にして元服致し頼光と名付けられ時の帝に仕奉りては重く用ひられ上總守に任ぜられ任滿ちて上洛致し陽明門を護り此時我が臣渡邊源二綱堀河戻り橋に於て愛宕山の鬼人も打ち取り世も靜まりしと思ひしに先の頃丹後國目代藤原保友よりの注進には亂暴狼籍なる逆徒大江山に籠り萬民に災を罹け近來は同國の千丈ケ岳に其首領酒呑童子若干の子分を連れ岩窟を作り之に立ち籠り其夭術は神變自在にして夜夜人里に出で老若男女の差別なく捕り歸り人心を恐怖すること夥し爰に於て帝より之を征伐せよとの勅命なり仰に從ひ藤原保昌を初め箕田源二渡邊綱卜部六郎季武坂田金時碓氷荒太郎貞道とて四天王及び我が長男下野判官源頼國を呼び出し其他諸代の連中多年恩顧の郎黨都合千三百餘騎を從へて攻め擊たんと候如何に四天王及頼國に申し候

四天王及頼國

御前に候

源頼光

四天王及賴國を呼び出すは餘の義にあらず帝の勅命に依り大江山及び千丈ヶ岳に籠り居る神變自在の鬼人を征伐致さんと思ふ故御供を成し給へ

四天王及賴國

心得申して候然れば早々出發を成し給へ

源賴光

吾々都を出發致してより攝津國多田の里の父滿仲公に暇乞を仕り更に進みて拍子峠、無根坂を越して候が日も西山に傾き申したり此の處に於て一泊仕らん

吾昨夜の夢は不思議なる故語り申さん餘の義にあらず神變自在なる鬼人の事なれば數多攻め入りても其の功なし依て汝一人千丈ヶ岳に乘り込めば勝を得る必せりとの神託なり汝等之を如何に思ふ

四天王

仰の趣き吾吾れも同じ夢を見たり然れども此處迄來りし軍勢を此儘歸すも如何せん爰に主君は御病氣にて藤原保昌及び四天王を從へ攝津多田迄御引き返し成され賴國公を總大將として大江山を取り圍みて攻むると發表し之に赴かしめ主從六人密に千丈ヶ岳に赴き申しては如何に

源賴光

善き計ひに候然れば我が子賴國總大將となり大江山に急ぎ申せ

源賴國

心得申して候（時年二十歳）

源賴光

吾吾六名人目を忍び千丈ヶ岳に急ぎ申すなり

我我は賴國と別れてより知らぬ旅路を踏み越して或る山中の芝の庵に着いて候此の處に一夜明し山伏姿に身を變じ十二道具を取り調へ申さん先づ山伏の頭の髪を一寸八分に切りてつまゆる事は上の六分はゑんの行者の爲となる中六分は生虫等の爲めと成る根の六分は我が衆生の爲めと成る又額を丸く作る事は大宗山の地藏面をも表すなり又口に吹き鳴す貝と申ずるは山に千年の齢を經て山の神の使者となり川に千年の齢を經て水神宮の使者となり海に千年の齢を經て龍宮公の使者となり三千年の齢を經て殼の貝とは申すなり一吹き吹けばしゆうりやしゆうり南洲里方七十里が其の内は惡魔も寄せじ魔も寄せじ二吹三吹も吹く吹くば四方の惡魔は吹き拂ひ五穀成就家内安全無病そくさいと吹き納むるほらのかひにて候亦た肩に掛けたる袈裟ともうするは後に四つの紋を着ける事は四想の星を表すなり亦手に持ちたる錫杖と申するは上に九輪を附ける事は九曜の星を表すなり六の鳴輪を附ける事は六はらむつを表すなり次に手に持ちたる數珠と申するは左にかけては乙女といつぱ金剛界右にかけてはたずまといつぱ大慈界前七偏とくる事は未來現在を現はかす後に十四偏と繰る事は過去現在を現かす數珠の小數は百八粒ましまして百八ぼんのう大坪大師宿

世萬行と繰り上げ奉る數珠にて候亦も某がつきとめたる金剛杖と申するは四角に削り八角に面を取る事は四角は四季を表すなり八角は八藏菩薩を表すなり亦も腰に差したる大小の劍と申するは大なるは大明利劍なり小なるは木明利劍なり大宗山に登りては芝打つによりて芝打ち刀と申すなり次に腰に着たる大口と申するは大宗山に登りては惡魔ひつしぐによりてひつしきとは申すなり我が住む鄕では惡魔取り滅すに依りて大口とは申すなり亦足にはいたる脚胖と申するは上のひもを下にとり下の紐を上にとり是れを縛ることは衆生再度の爲となる亦足に履いたる草鞋と申するは四つの疚を附け是を踏み開くは四季の四土用を踏み開かんが爲めなり斯くも十二道具も揃へ申して候へば藤の衣に笈掛け頭巾を面深に被つて金剛杖を持ち都方の山伏が伯耆の大仙山に參詣する體を見せ年長の順を遂ひ列を成し木木の梢を押し開き千草八千草踏み分けて道無き所を道となし千丈ケ岳を指して急ぎけるなり

急げば丹後の國八劍神社に着いて候へば我我は武運長久の祈禱を致し以て一夜を明し申すなり

最早夜も明方となりぬれば之より出發致し又も急ぎ申すなり

飛脚　出でて歌ひつつ通る

山伏　詞

若し吾吾は伯耆の大仙に參らんと此の山中に迷ひ込み困り居りますが何卒道を敎へて下さい

飛脚

其れは御氣毎じやが何分我は急用の事故敎へることは出來ません

山伏

左程急げば氣の毒じやが御前樣と同道しては呉れまいか

飛脚

何程言ひ分けしても聞き入れない人されば一緒に行きませう

山伏

往く往く飛脚の往く所と理由を尋ねる

飛脚

理に迫り詳細を物語り千丈ケ岳に連れ行き童子樣に委細を申す

酒呑童子

然れば山伏を是に通せ

飛脚

山伏を童子樣の前に通す

酒呑童子

其方達は何れの者で何處に行くのか

山伏

吾吾は都の山伏にて伯耆の大仙様に參詣する途中道に迷ひて之に連れ込まれました

酒呑童子

先達とあつて道に迷ふとは何事か

山伏

地理を知れるにあらず行を積りし功ありし故先達と云ふ

酒呑童子

剃髪せず法衣を着ざる其の譯は如何に

山伏

優婆塞なるが故なり

酒呑童子

優婆塞は肉食飲酒は戒なきか

山伏

戒あるに非ず無きに非ず禁じたるにあらず與へるなどは佛敎の開庶を申すものされば人施せば飲酒差閊な

し

酒呑童子

其れはうまいまぬがれ口上段々面白い都の人に面會は初めてなり吾今より酒肴の饗應致す召しあがれ

山伏

忝ふに候とて宴會し醉ひ伏したる所を刺し殺す

大正八年八月卅一日　印刷
大正八年九月　[illegible]日　發行

著者　廣島縣神職會
　　賀茂郡支會

發行者　廣島縣賀茂郡寺西村字四條東一三四一番地
　　脇謹爾

印刷者　廣島市新川場町六十六番地
　　景山敏晴

發行所　廣島縣神職會
　　賀茂郡支會

印刷所　廣島市新川場町六十六番地
　　景山至誠堂印刷部

8.10.13

324
606

終